

『源氏物語』「若紫」意象考

The Tale of Genji: Classic Purple Herb Imagery in the Creation of Wakamurasaki

張 培 華
ZHANG Peihua

一 はじめに

『源氏物語』若紫巻についての研究は多方面から優れた業績が蓄積してきた^①。しかし、古代中国と日本における古典意象論から見ると、まだ新たに考察する余地がある。意象論は人間の心意と物象を融合した審美的な方法である^②。この観点から若紫巻に関する物語の構成や登場人物の造型の方法を考察してみたい。

若紫巻の物語は、主人公である十八歳の源氏が「わらは病」にかかり、病気を治すために北山を訪れ、その際、藤壺と似ている少女を垣間見た。この少女は母が亡くなり祖母の尼君のところに生活している。少女の父は藤壺の兄の式部卿宮である。この点から見ると、少女が藤壺に似ている理由は血縁であるが、また興味深いことは、祖母や源氏が少女のことを「若草」や「初草」として和歌を詠んでおり、つまり少女のことを草に比喩していることである。源氏は祖母の尼君と相談し、この若草のような少女を引き取り二条院に迎え、少女を養うことを決めたの

である。この少女はのちの源氏と一生を伴う紫上という女性である。

ここで留意したいことは、源氏自身の心の中に恋の悩みがあるということである。すなわち桐壺巻から発生した源氏と藤壺の恋の問題である。しかも若紫巻では藤壺が源氏の子供を懐妊していたので、藤壺は源氏を避け、源氏は恋しい藤壺に会うことができなくなった。日々湧き上がったくる思慕を満たす方法がない源氏である。帚木巻から頭中将などの先輩の経験を受けて、源氏は空蟬という女性に出会ったが、この女性に拒絶された。また頭中将との間に娘を持つ夕顔をと会ったが、夕顔は急に亡くなってしまう。このような複雑な心境の中で若紫巻の幕が開いたところである。

究明したい疑問はなぜ「若紫」なのか。「若」はどういう意味なのか。なぜ少女を草に比喩するのか。なぜ作者が「紫草」に注目したのか。いったい源氏の「わらは病」はどのようなものなのか。なぜ源氏が強い紫草の少女を奪い二条院に迎えるのか。これらの問題について、本稿は、古典意象論の視点から改めて試みてみたい。

二 先行研究と問題の提起…なぜ草を少女に喩

若紫巻は『源氏物語』の中では最も重要な巻の一つである⁽³⁾。では、先行研究の中で如何に若紫巻を解読されてきたのか。主な論点を確認してみたい。

まず巻名の若紫については、例えば、玉上琢彌は『源氏物語評釈』の中で次のように述べている。

巻名は作者が命名したのだ、と考えると、「わかむらさき」の巻名に、作者の意図をよむ試みしてもよいことになる。この語「わかむらさき」は『伊勢物語』初段に初めて見える。『後撰集』に、「武蔵野は袖ひづばかり分けしかど若紫は尋ねわびにき」(巻十六、雑歌二、一一七八)と「まだきから思ひこき色にそむとや若紫の根を尋ぬらむ」(巻十八、雑歌四、一二七八)という二首が見える。ともに、題しらず、読人しらずである。この『後撰集』の歌も、『伊勢物語』の歌に依るものである⁽⁴⁾。

玉上は『源氏物語』「若紫」と『後撰集』「若紫」はいずれも『伊勢物語』初段から出典と指摘している。また玉上は『源氏物語』の作者の構想について、次のように説明している。

いま、作者は、巻名を「わかむらさき」と記し、読者に『伊勢物語』第一段を想起せしめる。出典を明示したのである。いま、作者は、読者の期待のうちに、出典を離れる。読者は、巻頭の二語から、『伊勢物語』初段を想起しつつ、それとの相違点を注意ぶかく教えてゆかなくてはならない⁽⁵⁾。

念のため、『伊勢物語』初段はどのようなものなのか、確認の便宜上、初段の本文を取り上げてみたい。引用文は新編日本古典文学全集による。

むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとほしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣の裾をきりて、歌を書きてやる。その男、信夫摺の狩衣をなむ着たりける。

春日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられずとなむおひつきていひやりける。ついでおもしろきこともや思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにしわれならなくに

といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける⁽⁶⁾。

都の男が垣間見た女に心が惹かれて、自らの若紫の摺り衣に歌を書いて、女に贈ったのである。歌語としての「若紫」は「若紫」の巻名と一致し、また若紫巻の源氏も最初に垣間見た少女の行爲も『伊勢物語』と似ているところが見える。玉上の指摘は否定できないが、では具体的に「若紫」はどのような意味を内包しているのか。この点については、『伊勢物語』初段の若紫は何を指したのかを確認することが必要と思われる。例えば、福井貞助は頭注の中で、「わかむらさき」は、「若々しい紫草」と注記している。同様な注釈は他の『伊勢物語』注釈にも見られ、このような解釈はすでに古註釈からも見える。例えば、北村季吟の『伊勢物語拾穂抄』の中に次のような注釈がある。

紫は草の名也。武蔵野にあり。春日野にもなどかなからん⁽⁷⁾

紫草について、折口信夫は『伊勢物語私記』には次のように解説している。

わかむらさき 紫草の、若い根の色の深くないのを取って、色々すり出すのが、「わか紫のすり衣」である。野には紫草があるからして、春日野のと言ったので、何も紫草が春日野村の産物に限ったことではない。

以上の如く、若紫巻の「若紫」の由来は『伊勢物語』初段と深く関係があり、また「若紫」の意味は、これらの指摘の通りに紫の色の草である。つまり「紫草」ということである。

ところが、素朴な疑問が浮かびあがってくる。なぜ作者が「若紫」を紫草に断りしたのか。この点については後に詳しく論じておきたいが、とりあえず注目したいのは、若紫巻の草を少女に指すという場面を取り上げて確認してみたい。すなわち次のような六つの場面である。それぞれの本文にA、B、C、D、E、Fを付けておく。引用文は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集 源氏物語』①（小学館、一九九四年）による。引用文の文末の（ ）には該当する巻名・頁数を示した。ゴシック字体は稿者が付けた。以下同。

A 幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。

生ひ立たむありかも知らぬ**若草**をおくらす露ぞ消えんそらなき
(若紫・二〇八頁)

B またみたる大人、「げに」とうち泣きて、

初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ

と聞こゆるほどに、僧都あなたより来て、「こなたはあらはにやべらむ。今日しも端におはしましけるかな。

C うち出でむ声づかひも恥づかしけれど、「いかなる方の御しるべに
(右同)

かは。おぼつかなく」と聞こゆ。「げに、うちつけなりとおぼめきたまはむもことわりなれど、

初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬと聞こえたまひてむや」とのたまふ。

D 入りて聞こゆ。「あな、いまめかし。この君や世づいたるほどにはするとぞ思すらん。さるにては、かの**若草**を、いかで聞いたまへることぞ」とさまさまあやしきに心乱れて、久しうなれば、情なしとして、

「枕ゆふ今宵ばかりの露けさを深山の苔にくらべざらなむ
ひがたうはべるものを」と聞こえたまふ。

E この**若草**の生ひ出でむほどのなほゆかしきを、似げないほど思へりしもことわりぞかし、言ひよりがたきことにもあるかな、いかにかまへて、ただ心やすく迎へとりて、明け暮れの慰めに見ん、兵部卿宮は、いとあてになまめいたまへれど、にほひやかになどもあらぬを、いかでかの一族におぼえたまふらむ、ひとつ后腹なればにや、など思す。ゆかりいと睦まじきに、いかでか、と深くおぼゆ。

F 秋の夕は、まして、心のいとまなく思し乱るる人の御あたり心にをかけて、あながちなるゆかりもたづねまほしき心まさりたまふなるべし、「消えんそらなき」とありし夕思し出でられて、恋しくも、また、見ば劣りやせむとさすがにあやふし。

手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の**若草**
(若紫・二二七―二二八頁)

右のA、B、C、D、E、Fの六箇所には、若草は(A・D・E・F)四箇所、初草は(B・C)二箇所。A「若草」は祖母の尼君が和歌の中で詠んだ孫娘の少女のこと。B「初草」は女房が祖母の尼君に対する答歌の中で詠んだAの少女のこと。C「初草」は源氏の歌の中で詠んだA、Bの少女のこと。D「若草」は前のA、B、Cの和歌に詠まれた少女のこと。E「若草」は前述したAとDの少女のこと。F「若草」は源氏が和歌の中で詠んだAとEの少女のこと。これらのAとFの「若草」と「初草」の意味はすべて草であり、いわゆる尼君の孫娘の少女を指すということである。そのうちAとBの間に表した「若草」と「初草」という表現について、鈴木宏子は次のように述べている。

歌ことば「若草」と「初草」について補足する。「若草」は定着した歌ことばだが「初草」は珍しく、平安和歌では『伊勢物語』の一例、若紫巻の二例、「堀川百首」の一例が確認できるのみである。『伊勢物語』四十九段では、兄の「若草」を受けて妹が「初草」と返すが、「初草の」は「めづらしき」に掛かる枕詞であるという表現上の必然性があったて用いられている。若紫巻の場合、贈歌の「若草」を「初草」に置き換えねばならない理由は、贈答歌内部には見当たらない。「若草／初草」という対は、『伊勢物語』の影を強く示唆する微なだと考えられる。¹⁾

鈴木は「若草」と「初草」という「対」の表現は、『伊勢物語』との密接な関係があることを強調している。この点については、阿部好臣の分析が参考になるのではないかと考えているので、阿部の要点を取り上げおきたい。

紫上は、若草の君である。紫上の呼称は螢卷(③二一四)まで待たねばならないのだが、未摘花卷(①三〇五)に「紫の君」の呼称

がないわけではない。ともあれ、『源氏物語』において、「初草」は二例全て、紫上を指す。「若草」は八例中の四例はこの巻で紫上を、他の四例のうち紅葉賀卷「大殿には、騒がれたまふ、いとどかの若草尋ねとりたまひしを、「二条院には人迎へ給ふなり」と人のきこえければ」(①三二六)の例は、紫上である。他の三例は、胡蝶卷「うちつけてねもみぬものを若草のことあり顔にむすほはらむ」(③一九〇)は、慕情を告白した源氏が詠んだ歌で、玉鬘のこと、柏木卷「庭もやうやう青み出づる若草みえわたり」(④三三六)とあるのは植物、さらに総角卷の「若草のねみむものとは思はねどむすほはれたる心地こそすれ」(⑤三〇五)は、匂宮が戯れに(禁忌への危惧を込めつつ)詠んだ歌で、女一宮を指す。若紫巻において、この「若草」「初草」は、さらに次のような展開をみせる。

前に贈答の場面を垣間見た光源氏は、それを踏まえて、尼君方の女房に「初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ」(①二二六)と消息の伝言を頼む、それをいぶかしむ尼君が「……かの若草を、いかで聞いたまへることぞ」(同)と思う場面が、続いて次にある。前段の「若草」「初草」を、「初草」「若草」と逆にした躰になっている。ただ、「初草の若葉」という表現によって、光源氏の贈歌は、「初草」「若草」を合体させた趣もないではない。だから、尼君の答歌「枕ゆふ今宵ばかりの露けさを深山の苔にくらべざらなむ」(同)に、「両語が見えないのもあろう。むしろ、光源氏の贈歌を故意にはぐらかしたのではあるが。そして、三番目の例においては、始めの贈答と光源氏の思いに分断されていたものが、合体するような叙述を生んでいる。「この若草の生ひ出てむほどのなほゆかしきを(略)迎へ取りて、明け暮れの慰めに見ん(略)

ゆかりいと睦ましきに、いかでか、と深うおぼゆ」(①二二七、八)。あの分断されているがゆえに、張りつめていたものが、「若草」「初草」という『伊勢物語』の禁忌侵犯的な様相を離れ、別なものに変質しつつある。すなわち、「若草」「ゆかり」が結びついて「草のゆかり」へと移行しつつあるのだ。

ここまで見てきたように、作者が「若紫」の意味は「若草」や「初草」などのような紫草を少女に指すということを明らかにした。

では、なぜ作者が紫草を少女に指さなければならぬのか。その理由を如何に解釈すればよいだろう。また源氏の「わらは病」はどのように理解すればよいだろう。さらになぜ源氏が強いて紫草の少女を二条院に迎えるのか。これらの問題を意象論の視点から新たに試みてみたい。

三 若紫→若草・初草→紫草→病気を治す→草葉の意象

前節に見たように、若紫を簡単に言うとき紫草である。なぜ作者が紫草にこだわったのか。結果を先に言えば、それは紫草が草葉の一種であるからである。つまり病気を治す効果があるからである。この点については後に詳しく論証する。先に「若紫」の「若」については草の意象と重なっていることを見てみたい。

従来では「若紫」の「若」は「若々しい」と解釈しているが、意象論の視点から見ると、「若」の文字は草の意味も見える。例えば、平安時代の『新撰字鏡』の中では、「若」の解釈は次の通りである。

『新撰字鏡』若 二月作而灼反杜若也比也 汝也如也善也。加太波美 右の「若」は、和文で「加太波美」(かたばみ)と呼ばれ、つまり草の一種である。平安時代では珍しい物ではない。例えば、清少納言は『枕

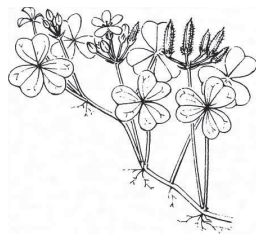
草子』第六四段「草は」の章段には、次のように書いてある。

草は菖蒲。菰。葵、いとをかし。神代よりして、さる挿頭となりけむ、いみじうめでたし。物のさまも、いとをかし。おもだかは、名のをかしきなり。心あがりしたらむと思ふに、三稜草。ひるむしる。苔。雪間の若草。こだに。かたばみ、綾の紋にてあるも、ことよりはをかし。

かたばみは葉が三つを分けて、その形を紋のように見える。『日本国語大辞典』によると、次のように見える(図一)。

かたばみ【酢漿草・酸漿草】

カタバミ科の多年草。各地の庭や道ばたに生える。茎は地をはい、または斜めに立って、長さ一〇〜三〇センチメートルになる。全体に細毛を生じる。葉は長柄をもち、三個の小葉からなる複葉。



図一「かたばみ」

清少納言と同じように草の意象から連想して、すぐ「かたばみ」を書いた如く、紫式部は「若紫」を設定した際に同じ字である「若」から容易に「かたばみ」のような草の花を連想したことは自然なことであると言えるだろう。また『白氏文集』を中宮彰子に教えていた紫式部には、有名な香草である杜若の意象も自然と知っていたはずである。『日本国語大辞典』によると、杜若の読み方は「かきつばた」という。

かきつばた【燕子花・杜若】

(和名は書付花(かきつげばな)の変化したもので、昔は、その花の汁で布を染めたところからいう。ふつう「燕子花・杜若」と書くが、漢名としてはいずれも誤用)⁽¹⁷⁾ アヤメ科の多年草。



図二「かきつばた」⁽¹⁸⁾

ついでに白居易が『白氏文集』卷三「〇一三七」諷諭詩「昆明春水満」の中で、杜若の香を使って、次のような詩句が見える。詩句の漢字は日本の常用漢字に直した。以下同。

今来緑水照ニ青天一 今来 緑水 青天を照らし、
 游魚撥撥蓮田 游魚撥撥として、蓮田たり。
 洲香杜若抽レ心長 洲香しくして 杜若心を抽くこと長く、
 沙暖鴛鴦鋪レ翅眠 沙暖かにして、鴛鴦翅を鋪きて眠る。

確かに清少納言は「かきつばた」を『枕草子』第八四段「めでたきもの」の章段の中でも書いたが、紫色の花はあまり好きではないらしい。⁽²⁰⁾ だが「めでたきもの」に明記され、当時ではすでにきな植物と言えらるう。⁽²¹⁾

『伊勢物語』第九段にも見える。⁽²²⁾ これらのような背景から見ると、作者の紫式部が若紫巻において若草と初草を少女に比喩した紫草に関する「若紫」の背後にある多様な草の意象を読み取れることが明解したのである。

ここで十分注意したいことは、作者が紫草から草葉の意象を受けたという展開点である。その由来は『源氏物語』以前の古典文学における紫草の意象であろう。例えば、「出雲国風土記」の「飯石の郡」に次のような紫草が見える。

幡昨山。郡家の正南五十二里なり。紫草あり。⁽²³⁾
 同じ「出雲国風土記」の「仁多の郡」でも次の三つの場所にも紫草があるようである。

志努坂野。郡家の西南卅一里なり。紫草少々あり。
 城紕野。郡家の正南一十里なり。紫草少々あり。
 大内野。郡家の正南廿二里なり。紫草少々あり。⁽²⁴⁾

勅撰和歌集では「むらさき」がたくさん詠まれたとは言えないが、『古今和歌集』の中では次の二首が見える。

『古今和歌集』卷第十七「八六七」
 題しらず よみ人しらず

紫のひともとゆへに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る⁽²⁵⁾

同前「八六八」
 妻のおとうとを持て侍ける人に、袍を贈る
 とて、よみて、遣りける 業平朝臣⁽²⁶⁾

むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける⁽²⁷⁾ 右のように、紫草は武蔵野の草を指すことは有名である。ここで留意したいのは、そもそも『万葉集』の中にしばしば登場された紫草の意象である。特に次の二二番の和歌である。

『万葉集』卷第一「二二」
 皇太子答御歌 明日香宮御宇天皇、諡曰二天武天皇一
 紫草能 尔保敝類妹乎 尔苦久有者 人孀故尔 吾恋目八方⁽²⁸⁾

紀曰、天皇七年丁卯夏五月五日、縦ニ獺於蒲生野一。于レ時、大皇弟諸王内臣及群臣、皆悉從焉。皇太子の答ふる御歌 明日香宮に天の下治めたまひし天皇、諡を天武天皇といふ

紫草の にはへる妹を 憎くあらば 人妻故に 我恋ひめやも 紀に曰く、「天皇の七年丁卯の夏五月五日、蒲生野に縦獺す。

時に、大皇弟・諸王・内臣また群臣、皆悉從ふ」といふ。明日香清御原宮の天皇の代天淳中原瀛真人天皇 諡を天武天皇といふ

右の歌に示した紫草は、古代日本の天皇が夏の五月五日に郊外に草薬を取るといつながりが見える。つまり紫草は草薬の一種として、草から草薬の意象に展開することが考えられる。例えば、『続日本紀』巻第十に聖武天皇の天平二年（七三〇）四月から六月までの草薬に関する記録が次のように見える。

辛未、始置ニ皇后宮職施薬院一。令下諸国以ニ職封并大臣家封戸庸物一充レ価、買ニ取草薬一、毎年進上之。

〔辛未、始めて皇后宮職に施薬院を置く。諸国をして職封并せて大臣家の封戸の庸の物を価に充て、草薬を買ひ取りて毎年に進らしむ。〕

また草薬を取る際、判断する基準は唐代の蘇敬の『新修本草』である。例えば、『続日本紀』巻第三十九では、延暦六年（七八七）五月の記録が次のように残されている。

戊戌、典薬寮言、蘇敬注新修本草、与ニ陶隱居集注本草一相検、増ニ一百余条一。亦今採用草薬。既合ニ敬説一。請行ニ用之一。許焉。

〔戊戌、典薬寮言さく、「蘇敬が注す新修本草は、陶隱居が集注の

本草と相検ぶるに、一百餘条を増せり。亦今採り用ゐる草薬は、既に敬が説に合へり。請はくは、これを行ひ用ゐむことを」ともうす。焉を許す。〕

平安時代では『新修本草』は極めて重要な教科書である。医生になる人は必ず蘇敬『新修本草』を精読しなければならない。この点について、『延喜式』には次のように明記している。

卷第十八 式部省上

凡医生、皆説ニ蘇敬注新修本草一、
〔凡そ医生は、皆蘇敬の新修本草を読め。〕

しかも学習者が『新修本草』の必修時間も、『延喜式』巻第三十七 典薬寮の中で次のように確認することができる。

凡心レ読ニ医経一者、大素経限ニ四百六十日一、新修本草三百十日、
〔凡そ医経を読むべくは、大素経は四百六十日を限れ、新修本草は三百十日、〕

興味深いことに、紫草は『新修本草』の中に記録されている。

唐・新修本草 草部 中品之上卷 第八 187 紫草

平安時代『本草和名』には「紫草」の読み方は「ムラサキ」という。

紫草 和名 牟良佐岐

当時の医学者である丹波康頼の『医心方』の中にはいずれも「杜若」と「紫草」が見える。

杜若 唐 現代漢方名は杜衡（杜若の別名の一つ）。

紫草 和名ムラサキ。ムラサキ科多年草ムラサキノウの根。

紫草の薬用について、『国史大辞典』では次のように解釈している。

日本・中国・朝鮮・アムール地方に広く分布するムラサキ科の多年草で、山地や草原に自生している。根が太く赤紫色をしており、こ

ここに紫の色素を含んでいるので紫根とも呼ばれる。この紫根から抽出した液に椿や枳(ひさかき)の灰汁で処理した糸や裂地を浸染し、紫に染め上げたのが紫根染で、本紫とも呼ばれてきた。紫草は薬用・染料として古くから利用されていたようで、飛鳥時代から栽培もなされていたと思われるが、広い土地を必要とする上、栽培もむずかかったようで、紫草は貴重視されてきた。³⁵⁾

また、木下武司『歴代日本薬局方収載 生薬大事典』によると、草葉としての紫草は次のような効果がある。引用文の漢字は常用漢字に直した。

【出典】 神農本草経中品「紫草 一名紫丹一名紫芙。味は苦く寒。山谷に生ず。心腹の邪氣、五疸を治し、中を補ひ、氣を益し、九竅を利し、水道を通ず。³⁶⁾」

さらに難波恒雄は『和漢薬の事典』の中で次のように述べている。

【出典】『神農本草経』の中品に「紫草(しそ)の原名で収載されている。³⁷⁾



図三「紫草」³⁸⁾

右の紫草の紫根の草薬の効能について、難波は次のように解説している。³⁸⁾

【薬理作用】発情期抑制・排精子抑制・抗菌(グラム陽性・陰性菌、真菌)・抗炎症(シコニン誘導体)。

特に平安時代では、紫草の使用量はかなり多い。例えば、『延喜式』の中で詳しく記録が見える。

- ① 卷六 神祇六 齋院司式 紫草百斤
- ② 卷十四 縫殿式 雑染用度 紫草卅斤
- ③ 卷十五 内蔵式 已上多武峯料 紫草八十斤
- ④ 卷十五 内蔵式 造五月五日 紫草五十斤
- ⑤ 卷十五 内蔵式 御服料 紫草一萬三百七斤十兩二分
- ⑥ 卷十五 内蔵式 中宮御服料 紫草二百八十五斤六兩
- ⑦ 卷十五 内蔵式 諸国年料供進 紫草四千五百斤
- ⑧ 卷二十三 民部式 大宰府 紫草日向八百斤
- ⑨ 卷二十三 民部式 交易雜物
- 甲斐国 紫草八百斤
- 相模国 紫草三千七百斤
- 武蔵国 紫草三千二百斤
- 下總国 紫草二千六百斤
- 常陸国 紫草三千八百斤
- 信濃国 紫草二千八百斤
- 上野国 紫草二千三百斤
- 下野国 紫草一千斤
- 出雲国 紫草一百斤

石見国 紫草一百斤

大宰府 紫草五千六百斤⁽⁴⁰⁾

右のように、紫草の膨大な使用量の中には、おそらく単なる紫草の根は染める材料としてだけでなく、草薬としての原料も含まれているだろう。紫草は貴重なものと考えられる。日本産の紫草だけでなく、大陸の唐からの輸入品もある。例えば、藤原実資『小右記』長和二年（一〇一三）七月の記録の中には次のような記事が見える。

長和二年七月廿五日、(中略) 藏規朝臣付亮範進唐物、雄黄二分二銖、甘松香十両、荒鬱金香十両、金青五両、紫草三枚、⁽⁴¹⁾

〔長和二年（一〇一三）七月二十五日、(中略)（藤原）藏規朝臣が、亮範に託して唐物を進上してきた（雄黄二分二銖、甘松香十両、荒鬱金香十両、紺青五両、紫草三枚）。〕⁽⁴²⁾

右の紫草は前述した『新修本草』草部の中品の上に属するものなので、貴重な草薬の原料であろう。

平安時代では草薬を利用した場合、五位以上の貴族は典薬寮へ申請しなければならぬ。この点については、『延喜式』の中に次のような記録が見える。

卷第三十七 典薬寮

凡五位已上、有レ須ニ草薬一者、就レ寮請之、

〔凡そ五位已上、草薬を須うるあらば、寮に就きて請けよ。〕⁽⁴³⁾

紫式部と親しい藤原道長が服用した草薬については、木下武司の考証によると、そのうち訶梨勒というものがある。「訶梨勒はシクンシ科ミロバラン属の果実を基原とする」ものである。また木下は訶梨勒の詳細を、次のように述べている。

本草では『新修本草』に木部下品として収載され、胸腹部の脹満、

体内の貯留物を排出する効果があるとされるが、軽い瀉下剤と考えてよいだろう。『御堂関白記』『小右記』では五ヶ所に訶梨勒丸の服用の記録あり、『延喜式』の雑給料にも「十三物訶梨勒丸二剂」（卷第三十七「典薬寮」）とあるから、平安貴族の間で珍重された薬物であったことが分かる。⁽⁴⁴⁾

右の如く、草薬に関する知識については、紫式部は当然知っていると考えられる。草の知識は清少納言と同じように強くと考えられる。おそらく草をもつて薬用となせることは清少納言よりもっと深く印象に残っただろう。なぜかと言うと、「草薬」という語彙は『枕草子』の中に見えないが、紫式部は当時の風病を治すため、草薬を飲む場面について生き生きと帯木巻の中に表している。

「さて、いと久しくまからざりしに、ものたよりに立ち寄りてはべれば、常のうちにけりたる方にははべらで、心やましき物越しにてなむ逢ひてはべる。ふすぶるにやと、をこがましくも、また、よきふしなりとも思ひたまふるに、このさかし人、はた、軽々しきもの怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひ取りて恨みざりけり。声もはやりかにて言ふやう、『月ごろ風病重きにたへかねて、極熱の草薬を服して、いと臭きによりなむえ対面賜らぬ。目のあたりならずとも、さるべからむ雑事らはうけたまはらむ』といとあはれにむべむべしく言ひはべり。

（帯木・八七頁）

極熱い草薬を飲むと、臭い匂いが漂ってくるのである。このように、病気を治す草薬の意象は紫式部にとっては決して忘れないだろう。むしろこのような草薬の意象を受けて、自らの物語を創作する際、意識的に登場人物の個性を暗喩したのではないかと認識される。それは若紫巻の

中で創出した紫草の少女であろう。なぜかと言うと、紫草の少女が、藤壺と似ている特性があり、源氏にとつては、この少女を得ることで、藤壺の恋病を治すことができるという構成が見えるからである。だからこそ若紫巻の冒頭文から「わらは病」を治すため北山へ行った源氏がすぐ藤壺と似ている少女を発現したことは第一伏線であろう。

注意しなければならぬポイントは、源氏の「わらは病」ということである。作者が「わらは病」には源氏の藤壺の恋の悩むことを暗喩したのではないだろうか。つまり源氏の「わらは病」はどのように解釈すればよいだろう。

四 源氏↓童の病↓藤壺の恋↓恋病を治す↓草薬の紫草を奪う

いったい冒頭文に書かれた源氏の「わらは病」はどのような意味であろう。源氏の「わらは病」は如何に解釈すればよいだろう。この点について古註釈から確認してみたい。

遡ってみると、『河海抄』では次のように解釈している。

わらはやみにわつらひ給て、巻頭 詞瘧病クワヤマ 瘧疾マラリア 瘧疾マラリア 瘧疾マラリア (46)

また『花鳥余情』では下記のように注釈がある。

わらはやみ 瘧瘧也寒熱あり毎日にやむをは日おこりと云日ませを
は隔日瘧と云也⁽⁴⁷⁾

右の『河海抄』と『花鳥余情』の解釈はいずれも「瘧病」である。このような解釈は現代『源氏物語』注釈書も同じように続いていることが見える。例えば、玉上琢彌の解釈は下記の通りである。

わらはやみ 瘧病。

また近年岩波文庫の解釈は次のようである。

マラリアに症状の似た流行病。後世に「おこり」というのと同じらしい。「寒熱並びに作⁽⁴⁸⁾り二日に一たび発⁽⁴⁹⁾る病」(和名抄)。物語中ではのちに朧月夜の君も罹患する(賢木50節)。子供の病気ではない。□末摘花7節に「わらは病にわづらひ給ひ、人知れぬものおもひの紛れも、御心の暇なきやうにて、春夏過ぎぬ」とあるのは、この巻と同年にあたり、源氏の君が空蟬および夕顔⁽⁴⁹⁾という二人の女に会った翌年のこと。ここでは、その春三月末である。

ところが、かつて山岸徳平は源氏の「わらは病」は「マラリア」ではないと次のように説明した。

源氏が「わらわ病」に悩みなされたので。「て」は原因。この「わらわ病」は「草ぶるい」の事で、俗にいう「おこり」とは別。故にマラリアではない。即ち「瘧」である⁽⁵⁰⁾。

また岸上は次のように補注している。

「わらわ病」即ち「瘧」(お)は種類が多い。寒熱が、隔日に起るものも、毎日起るものもある。桜の季節には、まだ「シナハマダラ蚊」が発生しないので、源氏の「わらわ病」は、いわゆる「マラリア」ではなく、「草ぶるい」と称するものである。「賢木巻」の朧月夜のは、時期的に今のマラリアであると思う⁽⁵¹⁾。

しかし、玉上琢彌は山岸の説を反発している。

ただし、この「若紫」の巻は、陰暦の三月でマラリアを仲介する蚊は発生していないから、マラリアではなく「草ぶるい」と称するものである、とする山岸説がある。しかし、地方によっては、はやくから草原などに蚊を見るそうであり、千年むかしは衛生思想が十分であり、これもマラリアと見てよいかと思う⁽⁵²⁾。

右の如く、今までの「わらは病」についての解釈は揺れていることが

事実である。玉上説と山岸説はどちらが正しいのか判断することが難しい。私見によれば、山岸の説に賛成したい。つまり同じ「わらは病」であるが、源氏と朧月夜はそれぞれの違うことである。すなわち朧月夜の「わらは病」は普通の現在と言えはマラリアであるが、源氏の方が別なものと考えられる。では、源氏の「わらは病」はどのように解釈すればよいであろう。

名詞「わらは病」は『源氏物語』の中には全部で四箇所ある。それぞれの本文を次の㉗㉘㉙㉚に示す。

㉗ 瘧病にわづらひたまひて、よろづにまじなひ、加持などまゐらせたまへどしるしなくて、あまたたびおこりたまひければ、ある人、「北山になむ、なにがし寺といふ所にかしこき行ひ人はべる。」

(若紫・一九九頁)

㉘ この上の聖の方に、源氏の中将の、瘧病まじなひにものしたまひけるを、ただ今なむ聞きつけはべる。

(若紫・二〇八―二〇九頁)

㉙ 瘧病にわづらひたまひ、人知れぬもの思ひのまぎれも、御心の暇なきやうにて、春夏過ぎぬ。

(末摘花・二七七頁)

㉚ そのころ尚侍の君まかだたまへり。瘧病に久しうなやみたまひて、まじなひなども心やすくせんとなりけり。

(賢木・一四三頁)

右にゴシック字体を付けたように、㉗㉘㉙㉚のうち、㉗の朧月夜のこと以外にすべて源氏のことである。山岸が指摘された通りに、朧月夜の瘧病は今のマラリアであるが、源氏の「わらは病」は別なものと考えて方がよいだろう。なぜかと言うと山岸の指摘されたように季節が合わない

いからである。たが、山岸が指摘した「草ぶるい」に基づいて、前述の草(紫草)に関わる暗喩の意味を合わせて考えてみたい。

作者の紫式部は多くの比喩する方法を活用している。例えば、若紫から紫草を少女に比喩することが前節で明らかにした。それは明喩と言える。冒頭文の「わらは病」は暗喩と考えられる。つまり「わらは」は源氏の「童」のことを暗喩している。まさに阿部好臣が次のように述べた通りである。

ここに表出された「わらはやみ」の字義に、もつと注目すべきだったのだ。「瘧病」と漢字を宛てることによつて見えなく部分、「わらは」＝「童」であること。

具体的な「わらは病」は、いわゆる源氏の童年時代に起こした藤壺への恋に悩むということである。この点については、作者が桐壺巻終りのところに明記したのである。

源氏の君は、上の常に召しまつせば、心やすく里住もえしたまはず、心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな、大殿の君、いとをかしげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおほえたまひて、幼きほどの心ひとつにかかりて、いと苦しきまでぞおはしける。

(桐壺・四九頁)

右の如く、源氏が幼い時から藤壺の恋に悩んでいることは大変な苦しいことである。表面的に「わらは病」には、内面的に源氏の藤壺に恋の「童の病」を暗喩していると理解される。また前掲した㉗の引用文をよく読んでみると、実に作者紫式部が「わらは病」の裏側の意味を明確しているところが見える。それは「瘧病にわづらひたまひ、人知れぬも

の思ひのまぎれも、御心の暇なきやうにて、春夏過ぎぬ。」のうち、「人知れぬ」ことである。すなわち藤壺の恋していることは源氏しかわからないという本人の心の恋病ということである。このことは暗喩した源氏の「わらは病」の意味が露呈しているのではないだろうか。

作者がこのような源氏の心の苦しい恋病を治すため、藤壺と似ている紫草の少女を誕生させたのである。草葉の意象を込めて、源氏がどうしてもこの少女の紫草を奪って、自ら恋病を慰めるための物語展開の経緯が次のようにはっきり読み取れるのである。

【経緯1】さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

(若紫・二〇七頁)

源氏が「わらは病」、つまり藤壺への恋病を治すため北山に行き、美しい少女を垣間見た。その少女が藤壺と似ているから、源氏は感動して涙がとまらない。作者がここに埋めた伏線としての草葉の意象を込めた少女である。つまり源氏の藤壺への恋病を治す人は、この紫草の少女しかない。

【経緯2】さて、いとつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

(若紫・二〇九頁)

美しい人が見つけて、しかも恋している藤壺にそっくり、そして源氏がどうしてもこのような藤壺と似ている人を二条院に迎え、恋慕している藤壺に代わり、毎日見ることで、自らの心の恋病を慰めることができる。

【経緯3】世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年

の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、いと苦しく思はずに、
ますます葵と源氏の間は無形な合わない壁が浮上してきたので、このままでは、年を取って、心苦しきと源氏が、やや焦っている心境である。

(若紫・二二六頁)

【経緯4】この若草の生ひ出でむほどのなほゆかしきを、似げないほどと思へりしもことわりぞかし、言ひよりがたきことにもあるかな、いかにかまへて、ただ心やすく迎へとりて、明け暮れの慰めに
見ん、

(若紫・二二七頁)

再び紫草のような少女を迎えて自らの恋病を慰めることを強調している。しかし、この少女はまだ若すぎて、どのように祖母の尼君と交渉するのかなどを考えなければならぬ。

【経緯5】いづくにもいづくにもまうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩き
たまふ。

(若紫・二三〇―二三二頁)

愛している藤壺に会いたい、いっぽう、藤壺は源氏のことを避けている、どこににいるのかどうすればよいのか、源氏が色々な方法を考えて、命婦に頼むことが一つの手法である。

【経緯6】殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ。御文なども、例の、御覧じ入れぬよしのみあれば、常のことながらも、つらういみじう思しほれて、内裏へも参らで二三日籠りおはすれば、また、いかなるにかと御心動かせたまふべかめるも、恐ろしうのみおぼえたまふ。

（若紫・二二二頁）
 相変わらず藤壺は美しいと源氏は思っているが、毎日会うことはできず、ますます深く恋慕の深淵に落ちている。病気ではないか帝が心配されているが、源氏も自らの藤壺への恋を帝に暴露することは極めて恐ろしい。

【経緯7】秋の夕は、まして、心のいとまなく思し乱るる人の御あたりを心にかけて、あながちなるゆかりもたづねまほしき心まさりたまふなるべし、「消えんそらなき」とありし夕思し出でられて、恋しくも、また、見は劣りやせむとさすがにあやふし。手に摘みていつしか見む紫のねにかよひける野辺の若草

（若紫・二二九頁）
 秋になると恋も深くなる。源氏は藤壺に似ている少女を迎える決意が強くなってくるのである。そういう心が動くのは自らの和歌の中に暗喩した心情を否定できない。つまり紫草の少女を奪うという決意である。

【経緯8】参りてありさまなど聞こえければ、あはれに思しやらるれど、さて通ひたまはむもさすがにすざるなる心地して、軽々しくもてひがめたる人もや漏り聞かむなど、つつましかれば、ただ迎へてむと思す。

（若紫・二五一頁）
 世間の噂を止めることができず、色々な現実の状況を把握し、源氏が思った通りに、ただ密かに紫草の少女を取り込むだけである。

【経緯9】その前に、しばし人にも口かためて、渡してむ、と思して、「暁、かしこにもものせむ。車の装束さながら、隨身一人二人仰せおきたれ」とのたまふ。うけたまはりて立ちぬ。

（若紫・二五二頁）

紫草のような少女を迎える計画を実施するべきだ。先手を打てば勝ち。早くしなければならぬ。

【経緯10】東の対に渡りたまへるに、たち出て、庭の木立、池の方などのぞきたまへば、霜枯れの前裁絵にかけるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位五位こきまぜに、隙なう出で入りつつ、げにをかき所かなと思す。御屏風どもなど、いとをかしき絵を見つつ、慰めておはするもはかなしや。

（若紫・二五八頁）

作者計算の通りに、藤壺と似ている少女、いわゆる紫草の草葉の意象を入れ込めたかなり若い女性を二条院に迎えることが実現したのである。これから毎日一緒にいるので、源氏の藤壺の恋病の心を慰めることが可能であろう。

右「経緯2」と「経緯4」および「経緯10」の中に示した「慰め」は、若紫巻の物語の中に強調された作者の意図と考える。つまり草葉の意象を込めた紫草の少女の造形は役立った葉の効果である。この少女は藤壺に似ているので、源氏の恋病に対する「慰め」の効果があるからこそ、源氏は自らのところに少女を迎える決意をしたのである。

五 おわりに

以上、『源氏物語』若紫巻の巻名から物語構成までの登場人物の造型についての特徴を考察してきた。古代中国と日本の意象論の視点によって、『若紫』には「若」草の意象が重なっていることが明らかである。また『新修本草』や『万葉集』などの紫草の草葉の意象を合わせて、紫草の少女

という登場人物の造型を考察した。つまりこの少女が藤壺と似ているから源氏の藤壺に関する恋病を治すことができるので、源氏は強いてこの少女を二条院に迎えたのである。そして改めて源氏の「わらは病」を考察した。すなわち源氏の幼い時から藤壺を恋する心の悩みである。最後に源氏が自らの恋病を治す為、どうしても草葉の効果ある少女を迎える経緯を考察した。

若紫巻に登場した少女は源氏の一生に不可欠な女性である。いわゆる紫上という源氏の感情的な柔和温順の妻である。⁽⁵⁾しかし、この女性にある源氏の恋病を治す効能はまだ続く可能性があるのか、今後続いて考察してみたい。

注

- (1) 近年代表的な論考は次の通りである。①東原伸明「散文の学としての源氏物語・テクスト論と近世源氏学の接点…『若紫』巻の冒頭の設定を端緒に」『高知県立大学文化論叢』第一一〇号、二〇二三年三月。②工藤重矩「源氏物語若紫巻の本文…本文異同の分布にみる諸本の様相覚書」『中古文学』第一〇九号、二〇二二年五月。③上原作和「定家本『若紫』の本文史」『物語研究』第二十一号、二〇二一年三月。④新美哲彦「新出『若紫』巻の本文と巻末付載『奥入』…定家監督書写四半本『源氏物語』との関係を中心に」『中古文学』第一〇六号、二〇二〇年十一月。⑤吉見健夫「『若紫』の表現と色彩…平安和歌の考察と『伊勢物語』『源氏物語』『紫式部日記』への展開」『国文学研究』第一八八号、早稲田大学国文学会、二〇一九年六月。

(2) 張培華「『源氏物語』『桐壺』意象考」『日本女子大学紀要』人間社会学部、第三三号、

二〇二三年三月。②張培華「『源氏物語』『末摘花』意象考」『物語研究』第二十三号、物語研究会、二〇二三年三月。以上の拙稿を参照。

(3) 藤本孝一「定家本 源氏物語 若紫」(八木書店、二〇二〇年) 三頁。

(4) 玉上琢彌「源氏物語評釈」二(角川書店、一九六五年) 二七頁。

(5) 右同。

(6) 福井貞助他「新編日本古典文学全集 伊勢物語 他」(小学館、一九九四年) 一一三—一二四頁。

(7) 右同。

(8) 例えば、阪倉篤義他「日本古典文学大系 伊勢物語 他」(岩波書店、一九五七年)の頭注では、「春日野の若い紫草」(一一一頁)。秋山慶他「新日本古典文学大系 伊勢物語 他」(岩波書店、一九九七年)の脚注では、「春日野の若々しい紫草」(七九頁)。

(9) 青木賜鶴子「伊勢物語拾穂抄 延宝八年刊本(片桐洋一藏)片桐洋一・山本登朗」『伊勢物語古註釈大成』七(笠間書院、二〇二二年) 四六頁。

(10) 折口信夫全集刊行会「折口信夫全集」15(中央公論社、一九九六年) 四六頁。

(11) 鈴木宏子「王朝和歌の想像力 古今集と源氏物語」(笠間書院 二〇二二年) 二九〇頁。

(12) 阿部好臣「物語文学組成論 源氏物語」I(笠間書院 二〇二二年) 二〇一—二〇二頁。

(13) 澤瀉久孝「古典索引叢刊 新撰字鏡」(全国書房、一九四四年) 四三八頁。

(14) 松尾聰・永井和子「新編日本古典文学全集 枕草子」(小学館、一九九七年) 一一八—一九頁。また田中重太郎「校本枕草子」総索引(古典文庫、一九七七年)によると、「かたばみ」は、三巻本と能因本にはそれぞれ二箇所、堺本と前田家本にはそれぞれ一箇所。(一七〇頁)

(15) 日本国語大辞典第二版編集委員会「日本国語大辞典」(小学館、二〇〇一年) 七三二頁。

(16) 伊藤博他「新日本古典文学大系 紫式部日記 他」(岩波書店、一九八九年) 三二五頁。

(17) 木下武司「わが国でカキツバタに対して用いる漢名は杜若のほかにもう一つある。尾形光琳作の屏風画「燕子花図」はカキツバタを描いた最高傑作の一つであるが、

- 『大和本草』によれば、燕子花^{エンシカ}の名の出典は『福州府誌』とする(巻之七 草之三)。カキツバタは万葉以降の古典文学によく登場するが、燕子花の名は江戸時代以前の国書になく、『大和本草』を初見とする。同『和漢古典植物名精解』(和泉書院、二〇一七年)二三八頁。
- (18) 前掲(15)同、三九三頁。
- (19) 岡村繁『新釈漢文大系 白氏文集』一(明治書院、二〇一七年)六一―六二二頁。
- (20) 前掲(14)同、一六八頁。
- (21) 秋山虔他『新日本古典文学大系 伊勢物語 他』(岩波書店、一九九七年)八七―九〇頁。
- (22) 植垣節也『新編日本古典文学全集 風土記』(岩波書店、一九九七年)二四五頁。
- (23) 右同、二五五頁。
- (24) 小島憲之・新井栄蔵『新日本古典文学大系 古今和歌集』(岩波書店、一九八九年)二六二頁。
- (25) 右同。
- (26) 小島憲之・木下正俊・東野治之『新編日本古典文学全集 万葉集』一(小学館、一九九四年)三七―三八頁。
- (27) 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸『続日本紀』二(岩波書店、一九九〇年)二三四―二三五頁。
- (28) 右同、五、三八四―三八五頁。
- (29) 虎尾俊哉『訳注日本史料 延喜式』中(集英社、二〇〇七年)五一〇―五一二頁。
- (30) 右同、下、三七〇―三七二頁。
- (31) 尚志鈞『唐・新修本草』(輯復本)(中国・安徽科学技术出版社 一九八二)二一九頁。
- (32) 奥謝野寛・正宗敦夫『本草和名』上巻、影印本(日本古典全集刊行会、一九四〇年)ムラサキ・卅ウ頁。
- (33) 横佐知子『医心方 薬名考』(筑摩書房、二〇一二年)七八頁。
- (34) 右同、九四頁。
- (35) 国史大辞典編集委員会『国史大辞典』(吉川弘文館、一九九二年)六七七頁。
- (36) 木下武司『歴代日本薬局方収載 生薬大事典』(ガイアブックス、二〇一五年)一九〇頁。
- (37) 難波恒雄『和漢薬の事典』新装版(朝倉書店、二〇〇七年)二二六頁。
- (38) 右同、一二七頁。
- (39) 前掲(37)同。
- (40) 皇典講究所全国神職会『延喜式』復刻版(臨川書店、一九九二年)①一八三頁。②五三七頁。③五六六頁。④五六九頁。⑤五七一頁。⑥五七二頁。⑦五八〇頁。⑧八〇七頁。⑨八二二―八二四頁。
- (41) 増補『史料大成』刊行会『増補史料大成 小右記』一(臨川書店、一九六五年)三三四頁。
- (42) 倉本一宏『現代語訳 小右記 三条天皇の信任』六(吉川弘文館、二〇一八年)二九頁。
- (43) 前掲(29)同、三七二―三七三頁。
- (44) 木下武司『続和漢古典植物名精解』上(和泉書院、二〇一二年)四六四頁。
- (45) 右同。
- (46) 四辻善成『河海抄』(日本文学古註釈大成 日本図書センター、一九七八年)七三頁。
- (47) 一條兼良『花鳥余情』(日本文学古註釈大成、日本図書センター、一九七八年)三九頁。
- (48) 前掲(4)同、二九頁。
- (49) 柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西裕一郎『岩波文庫 源氏物語』(一) 桐壺―末摘花(岩波書店、二〇一七年)三六五頁。
- (50) 山岸徳平『日本古典文学大系 源氏物語』一(岩波書店、一九五八年)一七七頁。
- (51) 右同、四三二頁。
- (52) 前掲(48)同。
- (53) 柳井滋・室伏信助・鈴木日出男・藤井貞和・今西裕一郎『新日本古典文学大系 源氏物語索引』別巻(岩波書店、一九九九年)五五一頁。
- (54) 前掲(12)同、九三頁。
- (55) 重松信弘『源氏物語研究叢書 源氏物語の人間研究』(風間書院、一九八〇年)三二二頁。